



周手術期看護実習に携わる看護師が学生に求める学習内容と看護基礎教育への期待

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 美和子, 小関, 真紀, 森, 一恵, 吉田, 智美, 田中, 京子, 高見沢, 恵美子, 大田, 直実, 澤田, 悦子, 沼波, 勢津子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00005596 |

原 著

周手術期看護実習に携わる看護師が学生に求める 学習内容と看護基礎教育への期待

Learning content of a perioperative nursing practicum necessary for students
and expectations for basic nursing education: a survey of nurses in charge of a
perioperative nursing practicum

小西美和子・小関 真紀・森 一恵・吉田 智美・田中 京子
高見沢恵美子・大田 直実*・澤田 悦子**・沼波勢津子***
Miwako KONISHI, Maki KOSEKI, Kazue MORI, Satomi YOSHIDA, Kyoko TANAKA,
Emiko TAKAMIZAWA, Naomi OTA, Etsuko SAWADA, Setsuko NUMANAMI

キーワード：周手術期看護実習，学習内容，臨床実習指導者，看護基礎教育

Key words: Perioperative nursing practicum, Learning content, Clinical instructor, Basic nursing education

Abstract

The purpose of this study was to elucidate the learning content perceived to be necessary for students by nurses in charge of a perioperative nursing practicum and their expectations for basic nursing education. An interview survey using a semi-structured questionnaire was conducted with 21 nurses.

The learning content perceived by nurses to be necessary for students before the practicum was classified into seven categories, including "basic knowledge and skills regarding perioperative nursing", "communication skills for developing human relationships", and "determination to learn toward a defined goal". The learning content perceived to be necessary for students during the practicum was classified into six categories, including "integration of knowledge and practice", "understanding of patients, including before treatment and after discharge", and "positive attitude toward self-study". In addition, expectations regarding basic nursing education were classified into six categories, including "nurturing of compassion toward the experiences of patients" and "improvements in thinking and self-expression abilities".

These findings suggest the need for investigation of teaching content and methods in basic nursing education for nurturing self-expression ability, compassion toward patients, and awareness of the aspiration to become a nursing professional, in addition to enhanced learning of knowledge and skills.

要 旨

本研究は、周手術期看護実習に携わる看護師が求める実習前、および実習を終えるまでの学習内容と、看護基礎教育への期待を明らかにすることを目的とした。21名の看護師を対象に半構成的質問紙を用いた面接調査を実施した。

その結果、看護師が学生に対して実習開始までに求める学習内容は、「周手術期看護の基本的な知識と技術」、「人間関係が形成できるコミュニケーション技術」、「目標をもち意欲的に学ぶ姿勢」など7カテゴリーに分類された。終了するまでに求める学習内容は、「知識と実践の統合」、「治療前や退院後も含めた患者理解」、「自ら学習を進める態度」などの6カテゴリーに分類された。さらに看護基礎教育に対する期待は「対象の体験を感じる心の育成」、「考え、表現する能力の向上」などの6カテゴリーに分類された。

今後、看護基礎教育において知識や技術の習得の強化に加え、自らの考えを表現する能力や患者の体験を感じる心、看護専門職をめざす者としての意識を育成するための教授内容や方法の検討の必要性が示唆された。

受付日：2007年10月13日 受理日：2007年12月26日

*大阪府立大学大学院看護学研究科博士後期課程

**大阪府立急性期・総合医療センター

***大阪府庁健康福祉部医務・福祉指導室事業者指導課

I. はじめに

周手術期医療を取り巻く環境は、医療技術の進歩により著しく変化しクリティカルパスや電子カルテの導入など、医療・看護体制の整備が急速に行われている。入院期間の短縮に伴って、限られた期間のなかで提供される看護内容の凝縮化、効率化も求められており、それらの変化を視野に入れた看護基礎教育の在り方が重要となると考える。

看護基礎教育における教育内容は、大学内で行われる講義、演習と、医療施設等で行われる臨地実習に大別される。とくに臨地実習は、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程であるとされ（日本看護協会編2006）、実習は学生の看護実践能力を獲得していくためにもっとも有効な教育手法として位置づけられている。看護学生の実習時間は1967年の1770時間から1998年には現行の1035時間に減少した。看護基礎教育の充実に関する検討会（2006）は、総授業時間数を増やし、生命・人権といった倫理教育の充実や患者とのコミュニケーション能力向上を図るなど、教育内容の改定についての要請を厚生労働省に提出している。最近では入院期間の短縮化、身体侵襲を伴う処置や複雑でより高度な技術を必要とする患者の増加など、周手術期看護実習の対象となる患者の選択や患者への看護を実施していく上での安全性を確保する上でも様々な困難が生じている。（明石2001、佐藤2001）。文部科学省から出された「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」の報告書は、臨地実習指導体制の問題点として、指導体制の整備の不足、実習の共通認識・理解の不足、教員の看護実践能力の乏しさが指摘されている。これらの問題に対する対策として学生の看護実践能力の到達度の適正評価を的確に行うことが重要で、そのためには臨地実習開始時、終了時における学習内容の習得レベルの確認、臨地実習の事前学習（知識、技術、態度）の充実、卒業時の到達度の確認を挙げている（日本看護協会編2006）。

これまで臨床実習における学習内容に関する研究では、学生を対象として実習での学びの内容（上野2001）、学びに影響を与えているもの（小林2000）について明らかにされている。基礎看護技術についての研究では、技術の到達状況が調査され、日常生活援助技術に対して、身体への侵襲を伴う基礎看護技術は見学にとどまっているという実態が明らかにされている（吉川2005）。また周手術期看護実習での学習内容に関する研究では、手術見学や集中治療室実習による学びが明らかにされ実習指導内容や方法の検討がされている（徳原2004、原嶋2003）。一方で臨床看護師を対象とした研究では、実習や学生の実習状況に関して指導者として考えていることが調査され、実習に向かう学生の姿勢や態度の不足、実習指導を行う上での困難などが明らかにされている（橋

田2004）。さらに卒業時の基礎看護技術の到達目標について教員側と臨床指導者側が臨地実習に求める意見を比較した調査では、臨床側は教員側よりも基礎看護技術の到達項目数が少ないことが明らかにされ、臨床側は学生に到達させる技術項目を限定し、基本的な看護技術を確実に習得して欲しいと望んでいると考えられる（吉田2001）。

そこで本研究は、大学における授業や演習の内容を検討する基礎的資料を得るために、周手術期看護を実践している臨地実習指導者を対象に、臨地実習の開始前、終了後にどのような学習内容の習得を望んでいるのかを捉えること、また技術についてだけでなく、知識や態度も含めた総合的な学習内容を捉えていきたいと考えた。臨床指導にあたっている看護師はさまざまな教育背景をもっているため、周手術期看護実習の学習内容の基盤として、大学教育にどのような期待をもっているのかを明らかにすることは、意義があると考えた。

以上のことから本研究の目的は、周手術期看護実習に携わる看護師が、実習開始までに、および実習を終えるまでに習得することを求めている学習内容、さらに大学における看護基礎教育への期待について明らかにすることである。

II. 用語の定義

周手術期看護実習とは、手術前・中・後にある患者を受け持ち、臨床での看護実践に参加し、個々の患者に必要なとされている看護を実施する実習とする。

学習内容とは、周手術期看護実習で習得、習熟することが必要な知識、技術、態度とする。

看護基礎教育とは、看護の専門職になるまでの学校での教育をさし、本研究においては大学における教育とする。

III. 研究方法

1. 対象

本学の周手術期看護実習を担当する病棟の主任、臨地実習指導者で、研究参加に同意の得られた者。

2. データ収集期間

2004年5月から8月

3. データ収集と分析方法

調査方法は、半構成的質問紙を用いて面接調査を行った。調査内容は、周手術期看護実習開始までに、および実習を終えるまでに習得することが望ましい学習内容、看護基礎教育への期待についてである。面接は、実習や病棟の状況が理解しやすいように、対象者の所属する病棟を実習担当している教員（共同研究者）が行った。面

接の日は、対象者の勤務に支障がないように配慮し対象者と相談して決めた。面接は、プライバシーの守られる個室で行い、時間は、30～60分とした。面接内容は、対象者の許可を得て録音し逐語録として記述した。

分析方法は、逐語録から周手術期看護実習開始までにおよび、実習を終えるまでに習得することが望ましい学習内容、看護基礎教育への期待を述べている部分を抽出し、それぞれに内容が類似するものをまとめて学習内容が明確になるように表現しサブカテゴリーとし、さらに内容が類似するサブカテゴリーをまとめてカテゴリーとした。分析は複数の共同研究者で行い、意見の一致をみるまで研究者間で協議を行った。

4. 倫理的配慮

大阪府立看護大学研究倫理委員会の承認を得た後、対象者に研究目的、方法、研究参加は自由意思であること、プライバシーの保護等を文書と口頭で説明し同意を得た。研究協力の有無は臨床実習指導者への評価や職務上の評価にはいっさい影響がないことを説明した。

IV. 結果

1. 対象の概要

対象は、計21名、女性で、周手術期看護実習を担当

している病棟（消化器外科、泌尿器科、整形外科、婦人科、耳鼻咽喉科、集中治療室）の看護師であった。看護師としての経験年数は、平均 16.2 ± 5.8 年で、臨床指導者歴は平均 4.6 ± 3.4 年であった。看護基礎教育を受けた教育施設は、看護専門学校15名、看護系短期大学6名であった。

2. 実習開始前までに習得することが望ましいと考える学習内容

実習開始前までに学生が習得することが望ましいと考える学習内容は、分析の結果、28サブカテゴリーが得られ、7つのカテゴリーにまとめられた（表1）。

ここではカテゴリーは<>で表し、サブカテゴリーは<>で表した。

<1. 疾患と治療の理解>には、<受け持ち患者の解剖生理と病態の理解>、<受け持ち患者の疾患と術式の学習>、<手術や麻酔によって生じる身体的影響の理解>、<手術前後で患者の症状や身体的変化が実感できる学習>が含まれた。

<2. 観察技術>には、<患者の観察・アセスメントに必要な技術の基本>、<患者の観察の基本を理解した上での応用の習得>、<バイタルサインと観察内容が関連していること<の理解>が含まれ、基本技術の習得を望む意見と、状況にあわせて応用できるまで習得できている

表1 実習開始前までに習得することが望ましい学習内容

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|--------------------------|------------------------------------|
| 1. 疾患と治療の理解 | ・受け持ち患者の解剖・生理と病態の理解 |
| | ・受け持ち患者の疾患と術式の学習 |
| | ・手術や麻酔によって生じる身体的影響の理解 |
| | ・手術前後で患者の症状や身体的変化が実感できる学習 |
| 2. 観察技術 | ・患者の観察・アセスメントに必要な技術の基本を押さえる |
| | ・患者の観察の基本を理解した上での応用の習得 |
| | ・バイタルサインと観察内容が関連していること<の理解 |
| 3. 周手術期看護の基本的な知識と技術 | ・全身麻酔を受ける患者の術前準備から術後を通じた学習 |
| | ・手術患者の回復過程の学習 |
| | ・日常生活援助に関する基本的知識の習得 |
| | ・患者の体内に挿入されているチューブ類に関する基本的知識と技術の学習 |
| | ・清潔援助に関する技術の体験 |
| 4. 手術による心理・社会面への影響 | ・手術後の患者の喪失や障害についての学習 |
| | ・退院後に社会生活を送ることを前提とした学習 |
| | ・患者の発達段階や欲求段階を把握した対象の理解 |
| | ・患者の気持ちを受け止めるためのコミュニケーション技術の習得 |
| 5. 人間関係が形成できるコミュニケーション技術 | ・コミュニケーションを使った人間関係の形成 |
| | ・患者の気持ちを察する態度 |
| | ・対象の個別性を理解した関わり方の学習 |
| 6. 学ぶ立場にある者としての態度 | ・目上の人に対して敬意を示す態度 |
| | ・学習者としての謙虚な姿勢 |
| | ・情緒が安定するよう自らコントロールする態度 |
| | ・実習生として自分の言動に責任を持つ態度 |
| 7. 目標を持ち意欲的に学ぶ姿勢 | ・目標となるような看護師像を持つ |
| | ・実習に意欲的に取り組む姿勢 |
| | ・考えて行動する態度 |
| | ・目指したい看護を考えた上で実習に臨む姿勢 |

ことを望む意見があった。

<3. 周手術期看護の基本的な知識と技術>には、《全身麻酔を受ける患者の術前準備から術後を通じた学習》、《手術患者の回復過程の学習》、《日常生活援助に関する基本的知識の習得》、《患者の体内に挿入されているチューブ類に関する基本的知識と技術の学習》、《清潔援助に関する技術の体験》、《清潔操作の基本的知識を押さえた上での技術の習得》が含まれた。清拭などの援助や清潔操作については、知識だけではなく援助技術を実際に体験しておくことが必要であるとする対象者もあった。

<4. 手術による心理・社会面への影響>には、《手術後の患者の喪失や障害についての学習》、《退院後に社会生活を送ることを前提とした学習》、《患者の発達段階や欲求段階を把握した対象の理解》が含まれた。

<5. 人間関係が形成できるコミュニケーション技術>には、《患者の気持ちを受け止めるためのコミュニケーション技術の習得》、《コミュニケーションを使った人間関係の形成》、《患者の気持ちを察する態度》、《対象の個性を理解した関わり方の学習》が含まれた。

<6. 学ぶ立場にある者としての態度>には、《目上の人に対して敬意を示す態度》、《学習者としての謙虚な姿勢》、《情緒が安定するよう自らコントロールする態度》、《実習生として自分の言動に責任を持つ態度》が含まれた。

<7. 目標をもち意欲的に学ぶ姿勢>には、《目標となるような看護師像を持つ》、《実習に意欲的に取り組む姿勢》、《考えて行動する態度》、《目指したい看護を考えた上で実習に臨む姿勢》が含まれた。

3. 実習を終えるまでに習得することが望ましい学習内容
実習を終えるまでに学生が習得することが望ましいと考える学習内容は、分析の結果、31サブカテゴリーが得られ、6つのカテゴリーにまとめられた(表2)。

<1. 疾患と治療の理解>には、《受け持ち患者の疾患や治療についての理解》、《手術後の身体的変化の理解》、《手術により身体に受ける影響とその根拠の理解》、《手術後の合併症の理解とその看護》、《解剖生理や術式からの患者の痛みの理解》、《手術後の患者の治療に必要な看護技術の理解》が含まれた。

表2 実習を終えるまでに習得することが望ましい学習内容

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---------------------|---------------------------|
| 1. 疾患と治療の理解 | ・受け持ち患者の疾患や治療についての理解 |
| | ・手術後の身体的変化の理解 |
| | ・手術により身体に受ける影響とその根拠の理解 |
| | ・手術後の合併症の理解とその看護 |
| | ・解剖生理や術式からの患者の痛みの理解 |
| | ・手術後の患者の治療に必要な看護技術の理解 |
| 2. 知識と実践の統合 | ・受け持ち患者の看護に必要な知識や技術 |
| | ・事前に調べた知識を実際と照らし合わせた理解 |
| | ・実際の看護場面の体験 |
| | ・ケアの根拠の理解 |
| | ・判断内容がみえる報告 |
| | ・患者の状態と観察した内容の関連づけ |
| 3. 個性に合わせた具体的なケアの実践 | ・焦点を当てた具体的な援助計画の立案 |
| | ・基本を押さえた上で個性に合わせた看護技術の提供 |
| | ・患者の回復に合わせたセルフケアの自立に向けた援助 |
| | ・手術後の患者の日常生活援助 |
| | ・安全で安楽な援助の提供 |
| | ・失声患者とのコミュニケーション技術の習得 |
| 4. 治療前や退院後も含めた患者理解 | ・入院前がんと告知されてからの患者の思いの理解 |
| | ・手術による容姿の変化がもたらす患者の苦みの理解 |
| | ・手術によって患者の生活が変化するものの理解 |
| | ・退院後の生活を見据えた指導の理解 |
| 5. 自ら学習を進める態度 | ・自分自身で疑問を持ち調べる態度 |
| | ・積極的に行動して学ぶ態度 |
| | ・自主的に学ぶ態度 |
| | ・看護師の援助から学び取る態度 |
| 6. 看護師としての基本的姿勢 | ・適切な言葉遣い |
| | ・社会人としての必要な態度 |
| | ・患者の立場に立って考える姿勢 |
| | ・日常生活での感覚を忘れず援助する姿勢 |
| | ・生命を守る仕事であることの理解 |

＜2. 知識と実践の統合＞には、＜受け持ち患者の看護に必要な知識や技術＞、＜事前に調べた知識を実際と照らし合わせた理解＞、＜実際の看護場面の体験＞、＜ケアの根拠の理解＞、＜判断内容がみえる報告＞、＜患者の状態と観察した内容の関連づけ＞が含まれた。

＜3. 個別性に合わせた具体的なケアの実践＞には、＜焦点を当てた具体的な援助計画の立案＞、＜基本を押さえた上で個別性に合わせた看護技術の提供＞、＜患者の回復に合わせたセルフケアの自立に向けた援助＞、＜手術後の患者の日常生活援助＞、＜安全で安楽な援助の提供＞、＜失声患者とのコミュニケーション技術の習得＞が含まれた。

＜4. 治療前や退院後も含めた患者理解＞には、＜入院前がんと告知されてからの患者の思いの理解＞、＜手術による容姿の変化がもたらす患者の苦しみの理解＞、＜手術によって患者の生活が変化することの理解＞、＜退院後の生活を見据えた指導の理解＞が含まれた。

＜5. 自ら学習を進める態度＞には、＜自分自身で疑問を持ち調べる態度＞、＜積極的に行動して学ぶ態度＞、＜自主的に学ぶ態度＞、＜看護師の援助から学び取る態度＞が含まれた。

＜6. 看護師としての基本的姿勢＞には、＜適切な言葉遣い＞、＜社会人としての必要な態度＞、＜患者の立場に立って考える姿勢＞、＜日常生活での感覚を忘れず援助する姿勢＞、＜生命を守る仕事であることへの理解＞が含まれた。

4. 看護基礎教育への期待

周手術期看護実習に携わる看護師の看護基礎教育への期待は、分析の結果、23サブカテゴリーが得られ、6つのカテゴリーにまとめられた(表3)。

＜1. 徹底した解剖生理の理解＞には、＜解剖生理や病態生理をしっかりと学習し、応用して考えられるようになること＞が含まれた。

＜2. 患者ケアに必要な看護技術の習得＞には、＜患者ケアに必要な援助技術をしっかりと習得してきてほしい＞、＜実際の場面での患者の状態が把握でき、ケアに結びつけられるような基礎教育＞が含まれた。

＜3. 対象の体験を感じる心の育成＞には、＜模擬体験を通して患者の身になり人の痛みがわかるようになってきてほしい＞、＜患者の立場で考えられるような場面を通して、言葉遣いや態度を身に付けてほしい＞、＜患者を人間として尊重するような態度で実習に臨んでほしい＞、＜患者がどのような経過を経て今があるのかを把握した上で対象を理解してほしい＞、＜もっと感受性を磨いてほしい＞、＜患者体験を通して、コミュニケーションスキルを習得してほしい＞、＜学内で模擬患者を活用した演習の工夫があればよい＞、＜学生にもっと生活体験をしてきてほしい＞、＜患者から拒否された場面を通して、自分を振り返る時間を持ってほしい＞

表3 周手術期看護実習に携わる看護師の看護基礎教育への期待

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|------------------------|--|
| 1. 徹底した解剖生理の理解 | ・解剖生理や病態生理をしっかりと学習し、応用して考えられるようになること |
| 2. 患者ケアに必要な援助技術の習得 | ・患者ケアに必要な援助技術をしっかりと習得してきてほしい ・実際の場面での患者の状態が把握でき、ケアに結びつけられるような基礎教育 |
| 3. 対象の体験を感じる心の育成 | ・模擬体験を通して患者の身になり人の痛みがわかるようになってきてほしい ・患者の立場で考えられるような場面を通して、言葉遣いや態度を身に付けてほしい ・患者を人間として尊重するような態度で実習に臨んでほしい ・患者がどのような経過を経て今があるのかを把握した上で対象を理解してほしい ・もっと感受性を磨いてほしい ・患者体験を通して、コミュニケーションスキルを習得してほしい ・学内で模擬患者を活用した演習の工夫があればよい ・学生にもっと生活体験をしてきてほしい ・患者から拒否された場面を通して、自分を振り返る時間を持ってほしい |
| 4. 考え表現する能力の向上 | ・ひとつのことを深く掘り下げて考える訓練をしてきてほしい ・学生同士で学びを共有することの必要性を考えさせる場を持ってほしい ・役割をもって行動できるようグループ学習方法を習得してほしい ・自らの看護を論文などにまとめる力を訓練してほしい |
| 5. 看護専門職を目指す者としての意識の育成 | ・自分の看護はこうありたいというものを学生時代に強くもってほしい ・看護専門職を目指す者としての意識がもてるようになってほしい ・実習ではもっと興味をもち自主的に学んでほしい ・患者の回復が自分の喜びに感じられるようになってほしい ・大学教員は実習前の学生に実習に興味を持てるような話をしてほしい |
| 6. 教授している学習内容の開示 | ・学生の情報や指導上のポイントを事前に知りたい ・学内での学習内容を臨床側に開示してほしい |

を人間として尊重するような態度で実習に臨んでほしい》、《患者がどのような経過を経て今があるのかを把握した上で対象を理解してほしい》、《もっと感受性を磨いてほしい》、《患者体験を通して、コミュニケーションスキルを習得してほしい》、《学内で模擬患者を活用した演習の工夫があればよい》、《学生にもっと生活体験をしてきてほしい》、《患者から拒否された場面を通して、自分を振り返る時間を持ってほしい》が含まれた。

＜4. 考え表現する能力の向上＞には、《ひとつのことを深く掘り下げて考える訓練をしてきてほしい》、《学生同士で学びを共有することの必要性を考えさせる場を持ってほしい》、《役割をもって行動できるようグループ学習方法を習得してほしい》、《自らの看護を論文などにまとめる力を訓練してほしい》が含まれた。

＜5. 看護専門職を目指す者としての意識の育成＞には、《自分の看護はこうありたいというものを学生時代に強くもってもらいたい》、《看護専門職を目指す者としての意識がもてるようになってほしい》、《実習ではもっと興味をもち自主的に学んでほしい》、《患者の回復が自分の喜びに感じられるようになってほしい》、《大学教員は実習前の学生に実習に興味を持てるような話をしてほしい》が含まれた。

＜6. 教授している学習内容の開示＞には、《学生の情報や指導上のポイントを事前に知りたい》、《学内での学習内容を臨床側に開示してほしい》が含まれた。

V. 考察

1. 周手術期看護実習に携わる看護師が考える実習による学習の深まり

本研究で得られたカテゴリーをもとに、関連を図に示した（図1）。＜疾患と治療の理解＞、＜観察技術＞、＜周手術期看護の基本的な知識と技術＞、＜疾患と治療の理解＞、＜知識と技術の統合＞、＜個別性に合わせたケアの実践＞は、周手術期にある患者の身体的な知識と直接的な援助技術を示しており、実習の体験を通して、知識と技術の統合と看護実践への発展という学習内容の深まりが求められていることを表している。

＜手術による心理・社会面への影響＞、＜人間関係が形成できるコミュニケーション技術＞、＜治療前や退院後も含めた患者理解＞は、手術を体験した患者の心理・社会的な側面の学習内容を示しており、実習によって、心理・社会面の知識と技術に基づいた幅広く豊かな患者理解へと学習が深まることが求められていることを表している。

＜目標を持ち意欲的に学ぶ姿勢＞、＜学ぶ立場にある者としての態度＞、＜自ら学習を進める態度＞、＜看護師としての基本姿勢＞は、すべての学習の基盤となる態度を示しており、専門職者としての姿勢の育成が求められていることを表している。

1) 体験を通じた知識と技術の統合と看護実践への発展

看護師が実習開始までに習得しておくことを求めている解剖生理や受け持ち患者の疾患、手術・麻酔による身

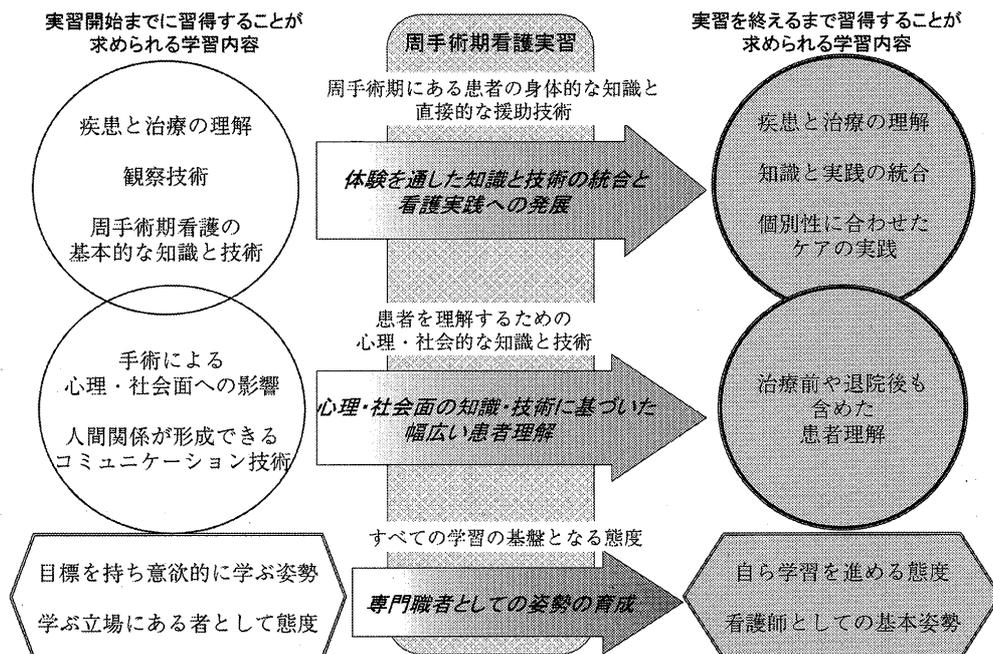


図1 周手術期看護実習に携わる看護師が考える実習による学習内容の深まり

体的影響などの必要な基本的な知識や技術に関する学習内容は、周手術期看護実習の学びのプロセスの中で、実習前の準備として不可欠であると捉えていた。それらの知識が準備された上で、実習で患者を受け持つことによって、手術による身体的影響やその根拠についてより具体的に理解が深まることが求められていたと考えられる。“バイタルサインの測定結果を手術に関する情報や患者の訴えと関連づけて考えるようになってほしい”や“痛みや呼吸をバラバラに観察するのではなく、矢印を繋げて観察することを学んでほしい”といった学習内容は、情報と情報の関連性を理解することであり、講義や自己学習で得た知識を机上の学習のままにせず実際に照らし合わせて理解することである。また“実際に受け持ち患者の手術を見学し、切開、剥離、ドレーン挿入などを見ることによって、術後の患者の痛みを理解し、援助の必要性を感じてほしい”、“見るだけでなく、ガーゼに触れて体験する学びをしてほしい”と考える対象者もあった。このことは、臨地実習の場だからこそ可能な体験に学習の価値を置く考えであったといえる。今回得られた結果は、手術室見学という経験が学生の対象理解をより深めることにつながったという報告（原嶋2003）からも裏付けられる。岩永（2005）は周手術期のプロセスと学生の直接的経験のなかで、学生が経験したことを教員が尊重する姿勢で引き出すことが学生の学びをより促進すると述べている。これらをふまえ、学生が体験したことを、既習の知識と繋げ、統合して理解していくために、教員の効果的な指導についても検討が必要であることが示唆された。

援助技術に関しては、清拭や清潔操作は知識だけでなく、実習前に体験しておくことが望まれ、実習では具体的な援助計画に基づき、個性性に合わせた援助や患者のセルフケア自立に向けた援助を習得することが求められた。周手術期看護実習の学習内容として難易度が高い身体に侵襲を及ぼす技術の習得よりも、基本的な日常生活援助をいかに個性性に合わせて提供できるかという視点での学習の深まりが求められていたといえる。この結果は実習施設が看護技術項目や到達レベルをより高く望んでいるのではないかというわれわれの予想と反していた。卒業時の看護技術到達目標を学校側と臨床側から調査した研究（吉田ら2001）においても、両者が多くの技術項目の習得ではなく、観察や判断など看護の科学的根拠となる看護技術、バイタルサインの測定や日常生活援助に必要な看護技術を確実に習得させることを重視しているという同様の結果が示されている。看護技術を実施していくための事前トレーニング等の事前学習の充実や、実習での看護技術の到達レベルについて臨地実習指導者と連携していくことは、今後の実習を運営していく上での重要な課題であると考えられる。

2) 心理・社会面の知識に基づいた幅広い患者理解

看護師は、周手術期実習開始までに習得することを求

めていた対象の心理・社会面の知識に関する学習内容として、術後の喪失感や術後に残る障害に関する知識、人間関係を形成するためのコミュニケーション技術の習得、患者の気持ちを察する態度が身に付いていることを重視していた。それらの知識と技術を活用して、実習を終えるまでには、実習で受け持つ入院期間だけでなく、入院前の告知時の患者の心理や退院後の生活の変化が強えられることなど、視野を広く持ち対象をより深く理解することが求められていると考える。岩永（2004）は周手術期看護学実習における看護学生の学びは、手術というプロセスを通して患者が変容していく過程から対象を理解することへとつながり、またその対象の理解を通して、学生は援助の必要性を判断し、手術の侵襲から回復過程へと導く看護実践の必要性を理解すると述べている。

一方で実習開始までに人間関係を形成するためのコミュニケーション技術を習得することは、現在の核家族化や人間関係の希薄さからくる若者のコミュニケーション不足の実態からすると、困難な現状にあると思われる。ペーパーペーシェントを用いた演習での工夫や模擬患者体験を取り入れた教授方法の工夫が必要であるが、患者とのコミュニケーションを学ぶには限界があることも否めず、これらの技術はあらゆる年代層の対象者とのコミュニケーションを図れる実習施設で習得することが必要であると考えられる。臨床側の理解を得ながらコミュニケーション技術をうまく活用できるよう具体的な指導を行い、対象の理解を深めることにつながるような臨床との連携を含めた対策が求められる。栗林ら（2002）は、臨床との連携をより円滑にするための取り組みとして、実習前において学生の傾向の把握、実習中に臨床指導者の学生カンファレンスへの参加を促している。臨床指導者からの直接的なアドバイスを受けることで、学生はより対象の理解を深める機会となると考えられる。

3) 基盤となる態度の育成

看護師が周手術期看護実習前までに学ぶ立場にある者としての習得を求めている態度は、学習者としての謙虚さや、実習に意欲的に取り組む姿勢であり、さらに、周手術期看護実習を通して、看護師として患者の立場に立って考える姿勢や患者の生命や生活を守る仕事であるという責任感を習得することを求められていた。

田島（2004）は、一般的な専門職教育の概念枠組みを用いて、看護師としての専門職能力は、「専門的能力」と「態度的能力」の2面から構成されると説明している。態度的能力には、看護職としてのアイデンティティや学問的関心や継続学習に対する意欲などが含まれ、看護職が他の専門職と肩を並べて活動することが増えているこれからの時代において、看護専門職教育の土台として組み入れ、かつ強化する必要があると述べている。本研究で明らかになった＜自ら学習を進める態度＞や＜看護師としての基本姿勢＞は、実習におけるすべての学習の基盤

となるものであり、身体的侵襲が大きい周手術期看護においても臨床指導者が学習内容として重要視していたと考える。専門職者としての態度的能力の基礎を養うものとして、重要で不可欠な学習内容であると考え。看護師としての基本姿勢を身に付けていくには、大学内での教育では限界があり、臨地実習において場面に触れ、考える機会が持てるような環境調整が必要であると考え。藤縄ら（2003）は、専門職アイデンティティは保健医療福祉専門職の教育において不可欠であるにもかかわらず、大学での学習だけでは不十分で、臨地実習を通じて徐々に確立されていくものであり、その点において臨地実習の意義は大きいと述べている。小林ら（2000）の調査でも、学生が実習を通して習得する学習内容のうち専門職としての役割・態度に影響を及ぼしている要因に、臨床実習指導者の指導が占める割合が高く、臨床実習指導者が看護師のモデルとして存在し、学習効果が高まることを示唆していた。学ぶ者としての態度や意欲的に学ぶ姿勢を基礎として、専門職としての態度を習得していただけることを視野に入れた大学、実習施設での教授内容の検討が求められると考える。

2. 看護基礎教育への期待

看護師が看護基礎教育への期待のなかで強調していたことは、＜対象の体験を感じる心の育成＞、＜考え表現する能力の向上＞、＜看護専門職を目指す者としての意識の育成＞についてであった。これらは実習に臨む上で学生に求められている基本的な能力が不足していることを看護師が感じ取り、看護基礎教育へせつに期待しているのでないかと考えられる。臨床の看護師を対象に臨地実習に関する考えを調査した研究（橋田2004）において、“学生が自分で考えない・理解しない”、“消極的”、“患者とのコミュニケーションの不足”、“看護師とのコミュニケーションの不足”などが明らかになっており、本研究で対象となった看護師にも同様の考えがあることが推察される。その一因には、現在の若者の生活体験の乏しさなどが反映していると思われ、看護基礎教育のなかでより強化していくことを看護師が望んでいると考える。本研究の対象者が看護基礎教育を受けた教育機関は短期大学または専門学校であり、大学での実習方法に戸惑いを感じている可能性も考えられ、それらの思いを解消する意味でも大学と臨床間の相互の意見交換が重要であると思われる。また、看護師自身が実習内容の理解不足や、到達レベルや指導内容への迷いを感じており（橋田2004）、よりよい実習を行うためには教員と臨床指導者の実習内容や実習方法の共通理解の促進と指導上の役割分担の検討が重要であると考え。

本研究で明らかになった看護基礎教育への期待は、周手術期看護実習のみならず、学生がそれぞれの授業や実習を経て、4年間を通じて育成、向上していく能力であると考え。看護基礎教育における講義や演習において

対象の理解や自己の考えを表現する場を積極的に設け、学習内容を深めていけるような教授方法の検討が求められると考える。さらに、領域間のコミュニケーションをとる機会を設けるなど、学生の能力の到達レベルを把握できるように大学全体の取り組みなども今後検討すべき課題であると考え。e-learningなどコンピュータや情報技術を介した教授方法が開発され、視覚的に学生の思考過程や判断能力の育成が強化されている一方で、人間関係の希薄さから欠如してきているコミュニケーション能力、専門職業人としての姿勢や態度の育成は不可欠であり、これらの能力を獲得していただけるような教育内容の検討が求められる。

VI. 本研究の限界

本研究の限界は、限られた施設での調査であること、実習の多くは指導者以外のスタッフに委ねていることも多い。今回の調査ではすべての看護師を対象にしていなかったために、得られた結果は多くの意見が反映されているとはいえない。以上のことから、今後も検討を続けていく必要があると考える。

VII. おわりに

周手術期看護実習に携わる看護師が求める学習内容を明らかにするなかで、臨床指導者は、実習開始までに学生が周手術期にある患者を理解するために身体、心理、社会面への影響についての知識だけでなく患者との人間関係を形成する上で必要なコミュニケーション技術や態度を備えておくことを重視していた。また実習を終えるまでに、学生が周手術期看護を実践していく上で、実際に経験して知識と技術を統合させて習得していくことが必要であり、そのために学生自身が主体的に学習を進めていく態度や専門職としての基本姿勢を育成することの重要性をさらに求めていた。今後、周手術期看護実習にむけた準備において重視する点は、周手術期看護を行う上で必要な知識、技術の習得だけでなく、態度面の育成も含めた教育内容の検討が必要であることが示唆された。

今後、実習をより効果的に行うためにも、実習施設と実習目標を共通理解すること、また実習目標がどれだけ到達できたかフィードバックを行うことも重要となると考える。

謝辞

調査にご協力頂きました実習指導者の皆様、病院の看護部の皆様に深く感謝申し上げます。本研究は、平成16年度大阪府立看護大学共同研究の助成を受けて実施しました。

文 献

- 明石恵子 (2001)：急性期（周手術期）看護実習の困難をどう乗り越えるか，看護展望，11号，17-22
- 藤縄理，水野智子，谷合義旦他 (2003)：学生の専門職アイデンティティ確立を援助するための教育についての検討，埼玉県立大学紀要，5巻，105-110.
- 橋田由史，吉本知恵，舟越和代他 (2004)：臨地実習における看護師の実習に関する意識－実習指導についての自由記述より－，日本看護学会論文集看護教育，p262-264.
- 細田泰子，山口明子 (2004)：実習指導者の教育的アプローチの特徴とその関連要因，日本看護学教育学会誌，2号，p1-15.
- 岩永和代 (2004)：周手術期看護学実習における看護学生の学び，日本看護学会論文集看護教育，p72-74.
- キャスリーンB.ゲイバーソン，マリリンH.オールマン著 (2002)：臨地実習のストラテジー，第1版，医学書院，p16-23.
- 柏木純子，松山澄子，田野島洋子他 (2000)：看護婦が学生の卒業時に期待する基礎看護技術到達度と臨地実習指導態度との関連，日本看護学会論文集看護教育，p122-124.
- 栗林浩子，小村三千代，福地麻貴子他 (2002)：大学と臨床との連携のあり方，Quality Nursing, 10, 67-72.
- 小林昭代，浦綾子，平直子他 (2001)：学生が「学べた」とする実習での学習内容と影響要因の調査，日本看護学会論文集看護教育，p36-38.
- 日本看護協会編 (2006)：平成17年度版看護白書，大学における看護実践能力の育成の充実に向けて，III臨地実習指導体制と新卒者の支援，p49-54.
- 岡田千鶴子，上田洋子，福田弘子 (2001)：周手術期実習における臨床側と学校側の連携－7年間の実習指導を振り返って－，看護展望，10号，p30-42.
- 佐々木真紀子，大島弓子，滝内隆子他 (2003)：看護短期大学学生の看護師の職業に対する認識－経時的変化と影響要因－，日本看護学教育学会誌，3号，p11-19.
- 佐藤まゆみ (2001)：成人看護学実習における現状と課題－周手術期患者の看護実習より－，Quality Nursing, 7号，p243-246.
- 田島桂子 (2004)：看護実践能力育成に向けた教育の基礎，医学書院，第2版，p97.
- 等々力菜美 (2005)：臨床実習での学生の学びに影響する看護師の行動，日本看護学会論文集看護教育，p275-277.
- 徳原多賀子，井本恵美子，戸井間充子 (2004)：ICU実習における看護学生の学習効果－実習記録の分析より－，日本看護学会論文集看護教育，p250-52.
- 上野公子，西脇友子，池田京子 (2001)：臨床実習における学生の学び，日本看護学会論文集看護教育，p149-151.
- 牛久保美津子，天野志保，井上智子 (2001)：激変する時代を視野に入れた成人看護学実習，看護展望，10号，p1500-1507.
- 山下満子，和泉春美 (2003)：学生の看護観の育ちと指導上の課題（第2報）成人看護学実習（内科系）前後のレポート分析と看護観形成に影響を与えた因子から，京都市立看護短期大学紀要，28号，p81-90.
- 吉田喜久代，櫻井ソノ，由井尚美他 (2001)：臨地実習に求める看護技術の到達目標，看護教育，11号，p1009-1023.
- 吉川千寿子，小林昭子，岩永和代他 (2001)：臨地実習指導者の関わりと学生の学習意欲の形成，日本看護学会論文集看護教育，p16-18.
- 吉川洋子，平野文子，三島三代子他 (2005)：臨地実習における看護基本技術の経験・到達状況と課題，日本看護学会論文集看護教育，P143-145.
- 第6回看護基礎教育の充実に関する検討会（2006.9.4）
http://www.nursing-policy.jp/kentokai/